

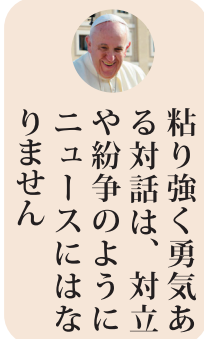


ガラシア病院 合同慰霊祭

この合同慰霊祭は毎年11月に行われている。対象は、前年の9月から翌年の8月までの1年間に亡くなられた「ガラシア会」関係者。2022年は11月14日(月)に行なわれた。今回、具体的には病院の入院患者・介護老人保健施設の入所者・在宅部門などで関わりがあり、亡くなられた方々297人。さらに、職員の家族関係で13人の合計310人だった。司式はガラシア会の理事、酒井俊弘補佐司教。コロナ禍前は病院のホールで100人以上のご遺族と共に祈りをささげ、その後、茶話会も設けられていたが、前年同様、今回も病院のチャペルで特定のスタッフと共に祈りをささげ、その様子を後日YouTube動画でご遺族に観ていただくという方法を取った。

酒井司教は式の中で「16世紀に始まった、日本で初めてのキリスト教病院や『ミゼリコルディア(慈悲)』というキリスト教精神に基づく孤児・老人施設」に触れ、「現在のガラシア会もその精神を受け継いでいる」と話された。

(文 ガラシア病院チャプレン 松本信愛神父)



第6章「対話と社会的友愛」

粘り強く勇氣ある対話は、対立や紛争のようにニューズにはなりません

198 多くの寛大な人の粘り強い対話がなければ、世界がどうなっていたかを考えてみれば十分です。粘り強く勇氣ある対話は、対立や紛争のようにニューズにはなりません。わたしたちが考えている以上に、世界にとって、よりよく生きる

キーワードで読み解く

兄弟の皆さん

連載第5回(全7回)

酒井俊弘補佐司教

第6章「対話と社会的友愛」の教皇フランシスコならではのキーワードをご紹介します。

ことに、目立たないながらも役に立っているのです。

第6章のテーマは「対話」。ニューズになつて飛び込んでくる対立や紛争の背景には、必ずといっていいほど対話の不足があります。それは一対一の友人や家族間でも、民族や国家間でも同じです。

いかなる合意をも超越した……妥協の余地のない価値

211〜212 基本的価値が対話

対話による合意が必要不可欠であることは、相対主義と同じではないと教皇は述べます。対話を通して絶対的な真理に至るのです。

対話という武器……出会いという優れた格闘

217 異なるものをすべて組み入れることは、はるかに困難で時間がかかることではあります。真の堅固な平和を保障するものです。……子どもたちには、対話という武器を装備させましょう。出会いという優れた格闘を教えましょう。

次世代の子どもたちにもこの武器と格闘を継承するために、大人たちがまずそれを身に着けましょう。

そんな優しい人が現れる奇跡

224 今日では、他者に優しく接するために、「いいですか」「ごめんなさい」「ありがとう」と口にしている一瞬の時間もエネルギーも、ほとんどなくなってしまう。それでも時折、無関心がはびこる中、自分の心配事や急ぎの用事は二の次にして、注意を向け、微笑みかけ、励ましの言葉をかけ、話を聞くための時間を作る、そんな優しい人が現れる奇跡が起こるのです。

第6章の締めくくりには教皇は現代世界が必要としている奇跡を語ります。この奇跡なら私たちにもできそうです。



ラジオ 信仰の時間

待つことを知る

〈11月27日放送分〉



中島貴幸神父 (オプス・デイ属人区)

この記事を目にされるときは、待降節は終わっていることでしょうか。しかし、待降節の精神の一面を考えるのは、どの季節においても有益だと思います。待降節は年末の慌ただしい季節に重なります。その雰囲気の中で、カトリック教会は「待つ」ということに目を向けるように呼びかけます。

以前、Sr 渡辺和子の著作を読んでいて、ドキッとした言葉に出会いました。それは、「あなたは、エレベーターに乗った時、閉まるボタンを押しますか?」というものです。私自身を振り返ってみると、ほとんどの場合は閉まるボタンを押していることに気がきました。シスターの

お話は、その問いかけに続いて、「なぜ、閉まるボタンを押すのですか? だまっていても自動的に閉まるのではないですか? なぜ、待てないのでしょうか?」という具合に、自分の心を見つめ直すように語りかけていました。確かに、そのボタンを押せば、数秒早く扉が閉まるでしょう。しかし、いつも閉まるボタンを押すのであれば、待つことのできない心の状態を示していると言えるかもしれません。

ヤコブの手紙に次のような言葉が記されています。「兄弟たち、主が来られるときまで忍耐しなさい。農夫は、秋の雨と春の雨が降るまで忍耐しながら、大地の尊い実りを待つのです。あなたがたも忍耐しなさい」(ヤコブ5・7~8)。農夫たちが、自然の恵み、実りを、忍耐して待つように、わたしたちも神の恵みを待つように、という教えです。

待つ、これは、社会生活の中で忘れがちな、大切な知恵であると思います。教育に関するお話の中で聞いたことです。子育て真っ最中のお母さんたちが、子どもに向ける代表的な言葉は、「はやくしなさい」なんだそうです。子どもの動作が遅く感じられ、待てないのですね……。しかし、この言葉は、かえって子どもたちを委縮させ、時には子どもたちの心を傷つけ、自信を失わせる危険な言葉なのだそうです。せっちな心、慌てる心は、自分の心の平和も失わせるし、周りの人たちの心も傷つけてしまう危険な状態です。

待つことを意識して過ごしてみませんか? まずは、エレベーターの閉まるボタンを押さな

いことから始めてみましょう。わずか2、3秒を待つことのできない自分に気づき、驚くことでしょうか。その次には、家族とのおしゃべりの中で、待つことを意識してみてください。気のおけないおしゃべりでは、相手が何を言いたいかを汲み取ろうという意識が希薄になりがちです。せめて相手が話し終わるまで待ってみましょう。さらに、お出かけ前の慌ただしい時など、気を付けないと、忘れ物をしがちです。慌ただしいからこそ、一度、椅子に腰かけて、落ち着いて、持ち物をチェックしたり、予定を再確認してみましょう。何分間も座る必要はありません。わずか30秒ほどでいいのです。この「ちょっと腰かけて」という行動は、心を平和にしてくれます。椅子に座って、「忘れ物をしないように思い出させてくださいね!」と神様に語りかけてみましょう。そうすると、忙しいさなかに、実は祈っていることにもなります。

待つことが身についていくなら、人間関係において、広い心、広い視野で人と関わることができるようになります。人に対して待つことは、愛の業です。待つことは、愛徳であり、したがって、神の慈しみの心で人びとと接することです。この待つ力を神様に願いましょう。

毎週日曜日 5:50 ~ 6:00AM 放送
1月担当: 酒井 淳神父
ABCラジオ(朝日放送) AM1008/FM93.3
スマホアプリのradikoでも聴けます。